



「柱島群島」



集落支援だより vol.50

柱島・黒島・端島

私事でたいへん恐縮ではございますが、今年度の任期で終了し、今春3月末をもって集落支援員を退任することとなりました。柱島群島には令和元年の5月に初めてお伺いさせていただき、それから約8ヶ月間、「柱島」・「端島」・「黒島」での集落点検を実施させていただきました。途中コロナの影響もございましたが、みなさんからのご理解とご協力を賜り、何とか三島での「集落調査報告会」も無事に開催することができました。

つきましては、今号を「私から見た柱島群島」と題し、自身の「集落支援だより」の最終号とさせていただきます。

実は当初、私は島民のみなさんが日々温暖で美しい自然環境に囲まれながら、「毎日をのんびりと島内で生活されているのだろう・・・」と、そんな勝手な解釈をしておりました。

令和元年5月のことです・・・

私は柱島からの定期船（すいせい）が岩国港に到着するのを待っておりました。

そして定期船が桟橋に接岸すると所用で島から本土に渡ってきた島の人たち、一方、仕事を終えて島へ帰っていく人たちなど、多くの方々が本土と島を行き来されていました。

それから約1時間、定期船に揺られて到着した柱島の船着場では、「船荷を取りに来られた方」「島内で商店を営んでいる方」「島の農水産物の生産加工をされている方」など、たくさんの方々が様々な役割を分担され、島内において活動されていました。

その後も集落調査を通じながら、何ら都市部とは変わらない、みなさんとの四季折々の「島での活動」や「島の暮らし」を実際に見たり聴いたりさせていただくことで、私は柱島群島のみなさんの生活を肌で感じることができました。

「では、都市部と島の人たちとの日常や暮らしとでは一体どこがどう違うのだろう」と、考えてみたところ「その答え」は島全体が高齢者の方を中心に快活に回っていたことでした。

周知のとおり、島のみなさんは本土と違って四方が海に囲まれ、どうしても埋められない時間的・距離的なハンディや特殊事情を抱えながら日々生活されておられます。

しかしながら、島のみなさんはそうした本土とは異なる生活環境の中で、人と人とのつながりを大切にされ、本土にはない自然豊かな環境の中でお互いが助け合う協力体制がしっかりと構築されている島々であると感じました。

そして誰もが「自分で出来ることは自分でやる」「ひとりでできないことはみんなで助け合う」「できない方にはみんなで力を添えてあげる」ということが、当たり前であり、改めて「人と人との関わり合いの大切さ」について感じることができました。

昨今、何かにつけて人と人とのつながりが希薄になりつつある世の中になってきたと言われています。しかしながら、都市部において失われつつある、相互で助け合う文化がこの柱島群島では触れることができ、また何事においても島民のみなさんの「負けない心」「へこたれない心」そして「助け合う心」と言った、柱島群島固有の「懐の深さ」や「島の底力」にたくさん出会い、貴重な経験をした数年間でありました。

これから5年10年後の柱島群島においては、更なる島の高齢化や人口減少に伴い、従来の島の枠組みでは対応できない多くの問題や困難等に直面することもあるかと思っています。

しかしながら、これからも島民のみなさんが一丸となり、岩国市唯一無二の有人島である柱島群島の「島づくり」が大いに推進され、「いつまでも住み慣れたこの島で、皆さんが不安なく暮らすことができる」持続可能な島づくりが形成されていくことを願い、自身の「集落支援だより」の終刊とさせていただきます。ありがとうございました！

退任後も、何卒よろしくお願い致します。